

組織目標評価報告書（平成25年度）

部局名：**大学院環境生命科学研究所  
廃棄物マネジメント研究センター**

| 目 標  | 目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組<br>(部局での検証とそれに対する取組)  |
|--|---|
| <p><b>①教育領域</b></p>  | <p><b>自己評価</b></p>  |
| <p><b>①-1 目標</b></p> <p>①先進異分野融合特別コースの充実に向けて「グリーンイノベーション概論」などの授業内容の改善を図る</p> <p>②アジア環境再生特別コースにおけるGPA制度や電子カルテ(大学院生教育指導カード)の活用方法について検証する。</p> <p>③先進基礎科学特別コースの充実に向けた運営の強化と授業内容の整備を図るとともに、進学者数の確保の取り組みを行う。</p> <p>④ESDに基づく留学生特別プログラムで提供された留学生にとって学びやすい英語講義の環境を充実させる。</p> <p>⑤岡山大学ユネスコチャアを中心として、持続発展教育(ESD)に関する国際拠点形成を行うとともに、開発途上国の環境保全に関する教育の国際連携を展開する。</p> <p>⑥環境生命科学研究所におけるコースワークの実質化を図るために、必要なコースとその教育内容について議論する。</p> <p>⑦「学都・岡山大学」にふさわしい環境生命科学の教育研究拠点形成を図るために、他研究科とも協力してリーディング大学院プログラムへの申請を行う。</p>  | <p>①履修者増大のために、オリエンテーションにおけるグリーン・イノベーションとライフ・イノベーションの科目説明を強化した。また、来年度に向けて、両イノベーション科目群への新科目の追加と、両イノベーション概論科目の提供講座の変更により講義内容の刷新を図った。</p> <p>②アジア環境再生特別コースにおいて、GPA制度や電子カルテの活用方法について教員と学生に対するアンケート調査を行い、利用実態を把握し使用上の問題点を明確にした。</p> <p>③先進基礎科学特別コースでは来年度開講の博士後期課程に2名の進学者を出すこととなった。今後も、進学者を増やすために新たなインセンティブとして特別学生奨励研究費の支給やRAの優先割当てなどの制度を設けることとなった。</p> <p>④研究科の中で英語化を進めており、来年度に向けて英語教育の推進(Technical Presentation in Englishのクラス数増加、Practice Presentation in Englishの新設と、留学生を対象に英語講義を受けて修士学位が取れるグローバルサイエンス特別コースの準備を行った。</p> <p>⑤プロジェクト実習(国際)については、昨年度5名の履修者を今年度は9名に増やして、海外連携校や連携機関の協力の下で開発途上国の環境保全等に関する調査研究を行った。ESDについては、来年度の岡山市で開催するESD国際会議に関連させて、ESD実践論を研究科の公開講座として実施することを決めた。</p> <p>⑥コースワークの実質化を図るために、専攻別のコースワーク表やカリキュラムマップを作成するとともに、履修概要や履修方法を日本語及び英語で作成し、それらを来年度の学生便覧に載せることとなった。</p> <p>⑦自然科学研究科と協力してダブルディグリーや複数教員による研究指導制度などの斬新な内容を盛り込んでリーディング大学院プログラムへの申請を行ったところ、採択は得られなかったものの研究科の教育研究方針を議論することができた。</p> |
| <p><b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>入学定員の充足率を100%とする。</p>   | <p>平成25年4月および10月入学者の合計に対する定員充足率は、博士前期課程で102.5%であったが、博士後期課程の充足率は54.8%と低い値となった。今後は博士後期課程への入学者数の増加に努める必要がある。</p>   |
| <p><b>②研究領域</b></p>  | <p><b>自己評価</b></p>  |
| <p><b>②-1 目標</b></p> <p>①平成24年～27年度特別経費「低炭素社会と食の安全・安心を統合して環境生命学的研究」を推進し、環境問題と食料問題を統合し、食料生産の持続性を担保する循環的環境管理システムの構築に向けた研究を遂行する。</p> <p>②研究成果の積極的な情報発信(e-Bulletinの活用、研究推進本部(含URA)との連携強化、国際交流の推進等)と融合新領域研究拠点形成に向けた研究体制を構築(科研費応募数と採択率の向上、概算要求などの競争的外部資金への積極的な応募等)する。</p>  | <p><b>②-1</b></p> <p>①・特別経費「低炭素社会と食の安全・安心を統合して環境生命学的研究」を通して循環的環境管理システムの構築に向けた研究を推進し、研究科内での環境学と農学の融合を図った。研究成果報告を兼ねた研究会を12月27日に実施し、本プロジェクトが目的に対して順調に推移していることを確認した。</p> <p>②・科研費応募に関して、研究推進本部と連携しながら、前年度の添削指導方法を変更し、若手教員ならびに新任教員を対象に添削指導を行った。採択率の向上が期待できる。</p> <p>・平成25年度『大学機能戦略経費』の公募に際して、特別経費(概算要求)ならびに競争的研究資金への申請と研究科の特徴である異分野融合を意識した提案に重点を置き、融合新領域研究拠点の形成に向けて取り組んだ。多数の提案の中から、平成26年度概算要求に繋がる新しい研究分野が創出されており、一定の成果を得ている。</p> <p>・e-Bulletin 12月号第5巻に研究成果が紹介され(Preparation of large porous zeolite bulk bodies)、世界に向けた研究成果の発信ができた。</p>  |
| <p><b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>競争的外部資金受け入れの5%増。</p>  | <p><b>②-2</b></p> <p>競争的外部資金受け入れ実績においては、件数で6%、総額で15%増加しており、目標を達成した。</p>   |
| <p><b>③社会貢献(診療を含む)領域</b></p>   | <p><b>自己評価</b></p>  |
| <p><b>③-1 目標</b></p> <p>①環境生命科学の教育研究拠点として、地域、国、さらに国際レベルで、持続発展教育(ESD)の普及発展、および環境問題と食料問題の解決に向けた社会貢献活動を促進する。そのために、岡山市が行う「国連ESDの10年最終年会合」の開催準備への協力、真庭市のバイオマスタウン政策への研究成果の普及などを進める。</p> <p>②国際交流協定の締結等によって国際貢献の促進を図る。</p> <p>③廃棄物マネジメント研究センターを中心として、「学官パートナーシップ」によるアジア・太平洋諸国を対象とした廃棄物マネジメントの実践的教育研究による事業を推進し、廃棄物マネジメント分野における社会貢献及び開発途上国での人材養成教育を強化する。</p>  | <p><b>③-1</b></p> <p>①26年度に岡山市が開催する「国連ESDの10年最終年会合」のために、それに関連した活動が岡山市で活発に行われており、それらの活動に研究科の教員が参加するとともに、関連した公開講座の開催を研究科でも準備した。真庭市のバイオマスタウン政策への研究成果の普及では、森林とその製材過程からのバイオマス材料利用あるいはエネルギー利用を地域と共同で積極的に推進した。</p> <p>②新たに国際交流協定を3件締結するとともに、これまで締結されている交流協定にもどづき、教員と大学院生による共同研究の推進と交換留学によって、国際交流を深めた。</p> <p>③廃棄物マネジメント研究センターは、中国、マレーシア、ベトナム、インドネシア、グアム等の地域で、現地の大学や機関との連携関係を保ちつつ環境研究を進めるとともに、海外人材育成実習であるプロジェクト実習3(国際)にも協力した。国内では市民イベントを開催して3Rや環境教育などESD関連の地域貢献を行った。</p> <p><b>③-2</b></p> <p>ムルシア大学獣医学部(スペイン) 大学間協定 H25.6.10締結<br/>プラー大学理学部(タイ王国) 部局間協定 H25.5.20締結<br/>ノンラム大学バイオテクノロジー環境研究所および獣医畜産学部(ベトナム社会主義共和国) 部局間協定 H25.11.11締結</p>  |
| <p><b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b></p> <p>新たな国際交流協定の締結。</p>   |   |
| <p><b>【総括記述欄】</b></p>  |   |
| <p>研究科長、研究科長室主導での管理運営体制を整備できたと考えている。本研究科はフィールドでの研究を主眼としている講座が多く、その意味でアジア、アフリカを研究の場としている教員が多く、それらの地域からの留学生も多いという現状を把握し、英語による教育の充実、留学生の奨学金の確保を重点事項として対応を行い、文部科学省の国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムに採択が決定した事は一定の成果と考えている。さらにASEAN地域の大学との交流協定をさらに深め、岡山大学が推進しているフエ大学院のプロジェクトをさらに発展させるべく検討を開始しており、積極的に留学生を受け入れ、その留学生が母国に帰国した後のフォローアップも含めてポジティブな好循環を生み出す制度を確立しつつある。</p> <p>さらに教員人事については、数値にとらわれない人材本位での公募、内部昇格を実施する方針を専攻長会議で周知し、将来の研究科、大学を担う人材の確保への前向きな姿勢を研究科長室から発信した。ウーマンテニュアトラック教員の採用についても岡山大学の中で最も多い採用を計画しており、今後とも将来を担う女性教員の採用に向けて積極的に行動を起こす事を研究科長室から教員に対して発信した。</p> |   |